

## 「上級2 書き方・プレゼンテーション」コース報告

小澤 伊久美

### [要旨]

本稿は「上級2 書き方・プレゼンテーション」コースの報告である。前半では、学生のメタ認知の育成を念頭に置いたクラス活動の実際を「メールを書く」という授業をもとに紹介し、期末試験の解答から学生達が「メールの書き方」についてどのようなメタ認知を持つようになったのかを指摘する。後半では学生達の調査・発表プロジェクトへの取り組みを、公開発表会までのプロセスを振り返りつつ概括し、発表の仕方について学生達がどのようなメタ認知を持ったかを紹介する。最後に、この実践が教師の役割や評価のあり方について何を示唆しうるか、また、このような実践をする場合の今後の課題について、学生の動機づけという側面を中心に言及する。

### [キーワード]

メタ認知      発表の仕方      教師の役割      評価      動機

### 1. はじめに

ICU 日本語教育プログラムでは、卒業要件として必須である上級1を終えてもなお日本語を学びたいという学生のために上級2というレベルを設定し、それぞれ独立した3種類のコースを開講している。筆者はそのうち「上級日本語2 書き方・プレゼンテーション」(以下、上級2WP)というコースを2003年度春学期に担当した。

そこでは後述の通り様々な活動に取り組んだのであるが、コース・デザインの際に大きな柱を2つ考えた。1つは学生にはコースの中では特定の文脈における活動に取り組んでもらうわけだが、それが将来の別な文脈での問題解決につなげるために自分自身の活動や知識についての「メタ認知」<sup>1)</sup>を持てるようにするということだ。各回のクラス活動や評価の際に常にそれを念頭においてコースを運営した。もう1つはお仕着せではなく自分自身が欲することについて調べ、話し、書き、伝えるという1つのプロジェクトに取り組むということである。これはグループ作業による調査・議論をもとに、学期末に学内関係部署の教職員を招いて行った『ICUの留学生を増やすためには—留学生の立場からICUへの提言—』という発表会へと発展することになった。

本稿はこのような活動を柱とした「上級2WP」コースの実践報告である。以下、第2節ではコース概要の紹介、第3節では「メールの書き方」についてのクラス活動の報告、第4節では調査・発表プロジェクトのクラス活動を紹介します。その上で、第5節ではこの実践

の示唆すること、また課題をまとめたい。

## 2. コースの概要

2003年度春学期の上級2WPは週1日、お昼休みを挟んだ2コマ（各70分）からなり、試験期間を除き正味9週間<sup>2)</sup>のコースであった。1コマ目は通常の教室で、2コマ目はマルチ・メディア・ルーム（以下、MMR）<sup>3)</sup>という部屋で授業を行った。筆者の担当した学期は教師は筆者1名で履修者は7名だった。学生は全員ICUに来て3学期目（つまりその学期が終わると1年間滞在していたことになる）を迎えていた。

### <学生内訳>

男女別： 男性1、女性6

国籍： 中国3（香港2、台湾1）、米国2（うち日系1）、  
オーストラリア・ロシア・リトアニア 各1  
ニュージーランドと中国（香港）の二重国籍者 1

コースの目的は「様々なジャンルのものを書くこと、またプレゼンテーションすることを通じて、大学生として必要な日本語の文章執筆能力やプレゼンテーション・スキルを身に付ける」であった。といっても学生は皆、それまでの学期に「日本語6」や「上級1 書き方」「上級1 話し方」などのコースを履修しており、ワープロソフトを利用してA4サイズで10枚程度の長さで自分の意見を資料等で裏付けて展開するというレポート執筆や、手紙などの実用文の書き方などの課題に取り組んできていたし、スピーチやグループディスカッションなども繰り返し練習してきている、という状況にあった。

しかし、直前の学期に彼ら全員が履修していた「上級1 書き方」を担当していた筆者は、彼らの書く文章が日本語の文法や語彙といった面ではまだまだ課題が多いと感じていたこと、そしてICUにおける最終学期であると共に上級というレベルであるためこれが彼らのほとんどにとって最後の日本語授業になる可能性が大であるということから、今後の自律学習を支えるためのメタ認知を育てたいと考えてコース・デザインに取り組んだ。

学生に提示したコースの内容と成績、スケジュールは以下の通りである。

### <コース内容>

1. メールによる案内などの実用文から意見文まで様々な文章が、その目的や対象に対して効果的であるかどうかを比較検討する。
2. 同じようなジャンルの文章を、対象や目的を設定して、自分たちでも書いてみる。
3. プレゼンテーションも繰り返し演習する（Power Pointなどのソフトも必要に応

じて利用する)

4. 一学期間を通じて、各自が「文章によって自分を表現する」プロジェクトに取り組む（学期の最後はそれについてのプレゼンテーションを行う）。

#### <成績>

課題 50%、期末試験 20%、プロジェクト 20%、クラスへの参加度 10%

A (100~90%)、B (~80%)、C (~70%)、D (~60%)、E (60%未満)

#### <スケジュール<sup>4)</sup>>

1 週目：コース概要説明

電子メール（携帯メールと PC メールの違い、書く際の留意点）

2 週目：案内文の書き方、発表会について相談

3 週目：口頭発表の仕方、レジユメの書き方、Power Point の使い方

4 週目：調査・発表プロジェクトのテーマや進め方について中間報告会

5 週目：中間報告会フィードバック、報告書・議事録の書き方

6 週目：エッセイを書く

7 週目：ホームページ作成

8 週目：発表会準備（案内状作成など）

9 週目：発表会リハーサル+発表会

10 週目：期末試験

### 3. クラス活動の例 1：「メールの書き方」

コースを通じて何度かテーマを決めて、書かれた文章の形式その他についてモデルを見ながら議論し、それにもとづいて自分たちでも同様の文書を書く、ということを実行した。このコースでは上述のように学生達自身が日本語を書いたり発表したりする技能を磨くことはもちろんだが、どのようなところが大事であるか、気をつけるべきか、学ぶべきかといった意識を育てる、つまりメタ認知を育てることを目標としていた。この節ではその例としてメールの書き方についての授業活動を紹介する。

1 コマ目では、まず、携帯電話機でやりとりするメール（以下、携帯メール）とパソコンでやりとりするメール（以下、PCメール）の違いを全員で考えた。このメールについての議論は学生のニーズにも合致したようで大変熱心に意見交換をしたりメモをとったりしつつ取り組んでいる様子が観察された。

日本における携帯電話の契約数は 2002 年度末現在 7566 万件<sup>5)</sup>と国民の 2 人に 1 人が所有していると言われるほどだが、筆者の観察するところでは本学の留学生の多くも携帯電

話を所有している。短期滞在の学生にとっては高額な電話加入権を購入するよりも月単位で契約できる携帯電話の方が経済的であることや、どこにいても母国にいる家族からの電話が受けられる利便性が購入のきっかけとなるようだ。筆者のクラスの学生達によると、購入後は電話はもちろんメールも頻繁に使用しており、携帯メールは日本人学生とのコミュニケーションの重要な媒体の一つとなっているそうだ。PCメールと違い、携帯メールは母国ではあまり使っていなかったという学生が多く、携帯メールが絵文字なども使って日本人学生のように書けるようになりたいという声が聞かれたので今学期の授業に取上げたのだが、その目論見は成功したと言える。

クラス全体での議論ではPCメールと携帯メールの違いとして、アクセスの頻度（つまり着信から相手に読んでもらえるまでの時間の長短）、文字数制限の有無、携帯メールは会社や契約によって受信可能な文字数や文字種が異なること、画面のサイズの相違（つまり読みやすさに対する配慮が変わること）、絵文字の使用度の違い、HTML形式の使用の可否、CCとBCCの違いや使い分けの理由などたくさんの点が指摘された。また、議論の中に出てきた内容がきっかけとなって、各自それまでに知らなかった機能や絵文字の書き方・意味などについてお互いに聞き合い、教え合う場ともなっていた。

次に『日本語を書くトレーニング』（野田尚史・森口稔著、ひつじ書房）に掲載の「お知らせのメール」と「問合せのメール」からメールの例文をいくつか読み、問題点・疑問点など気付いたことを皆で話し合い、先にクラス全体で共有した携帯メールの特徴が実際の文面にどう関わっているかを確認した。

2コマ目のMMRでの授業では、1コマ目で確認した留意点を念頭に置きつつ、各自が実際にメールを書いた。ちょうど学期が始まってすぐの時期だったので、このクラスの飲み会を企画するという設定で各自幹事になったつもりでクラスメートと教師に都合を聞くというメールを書いた。全員PCメールを送付したわけだが、受信先には携帯メールを持っている学生には携帯メールにも受信させたので送付者は相手の受信状況によって体裁を変えたり、相手と自分との関係によって言葉遣いを変えたり、BCCやCCを使って複数名に送信する形にした<sup>6)</sup>。

この1時間の間に何通ものメールを書き、受信したわけだが、このコマの最後にはそれらを読んで違いを読み取ったり改善点を指摘したりするという時間を取った。各自のメールはそれぞれ個性が表れた文章であったが、それらの表現の違いを楽しむと同時に、情報のわかりやすさや絵文字の使い方、敬意表現の適切さについて活発に意見交換が行なわれた。

メールの書き方について授業で取上げたのはこの週だけであるが、この後に続く調査・発表の活動では学生間の相談のやりとりや調査に協力してくれた人々とのやりとりのほとんどにメールが使われ、毎週グループ作業に割かれた授業時間では進捗状況を教師に報告

する時間を取らない代わりにグループディスカッションの要点を議事録にまとめてメールで提出させたりした<sup>7)</sup>ため、学期を通じてメールは様々な機会に色々な相手に対して頻繁に利用することになった。

これらの活動を通して筆者は学生達に「特定の用件について特定の相手にメールを出す時の書き方」だけではなく、別の状況でも生かす知識として「メールを書く際にはどんな点に留意すべきか」という視点を養う（つまりメタ認知を持つ）ことができるよう心がけてみた。それが学期末にはどのような形で学生に認識されたかを期末試験の解答から見てみたい。

<資料1：期末試験より「メールの書き方」についての設問>

☆次のようなメールが根津先生<sup>8)</sup>に来たとします。それを読んで質問に答えなさい。

根津先生

先学期クラスをとっていた JASTIN です m(\_ \_)m お元気ですか(' \_ ')?  
今学期小沢先生のクラスをとっているんですけど、飲み会に行くことになりました。  
根津先生もさそってくださいって小沢先生が言ってたからメールしました。  
今週の金曜日の6時に吉祥寺の伊勢屋です。それじゃ、待ってま〜す(^-^)/

ジャスティン

- 1) どんなところが問題か指摘しなさい。
- 2) あなただったらどのようなメールにするか書きなさい。足りない情報は自分で適当に考えていれていいです。

期末試験はMMRで実施し、各自パソコンを使ってメールや意見文などの文章を書き（辞書の利用は可）、教師にメールで送るという形にした。手書きでなく端末からの入力という形式にしたのは、今学期の授業ではほとんどの文書がその形式で書かれたということと、限られた時間に何種類もの文章を書くためには手書きよりもワープロの方が向いているからである。問題もMS-Wordでメールにより学生に試験開始直後に配付し、学生はそこに答えを書込んでメールで教師に返すという形をとった。文字化けやメールの送受信の問題には実施時間も含めて個別に対処するつもりで始めたが大きな問題はなく終了した。

メールの書き方について筆者は前頁の資料1のような出題をした。学生達の解答には、約半数の者はこのメールの問題点はほぼわかるがそれを適切に表現し直すことがまだ難しいということが表れており興味深い。いくつか例を挙げよう。

<解答例1>

1) ジャスティンのメールの問題点

- ア) 先生へのメールはもう少しフォーマルに書いた方がいいと思います。
- イ) 「小沢先生に言われて誘います」と言うと、自分自身が誘いたくないかもしれない気がしてしまいます。
- ウ) 情報が足りません (待ち合わせの場所、誰がその飲み会に行きますかなど)

2) 書き直し案

根津先生

先学期根津先生の上級日本語1書き方をとっていた〇〇と申します。

今学期小沢先生の上級日本語2書き方をとっていますが、今週の金曜日に上級日本語2全員が飲み会に行くことになりました。小沢先生にも来ていただきます。

お忙しいところと思いますが、根津先生も来てくだされば皆が喜びます。ご都合が宜しければ、是非いらして下さい。

場所 吉祥寺の伊勢屋

待ち合わせ 20日(金)午後6時に吉祥寺駅南口

お待ちしております。

〇〇

<解答例2>

1) ジャスティンのメールの問題点

- 1. 問題はジャスティンのメールはあまりフォーマルではなくて、先生に送るメールなのに、友達に送るように書きました。たとえば、メールの中で「かお」が一杯あります。それは携帯電話のメールみたいです。
- 2. 待ってまーす。これも友達のようなメールになってしまいました。

3. 私の意見ですが、このメールの内容はいったい何を伝えたいですか。ちょっと意味がないと思います。
4. 根津先生はもしこのメールを見たら、かならず倒れてしまうと思います。

## 2) 書き直し案

根津先生へ

こんにちは。先学期根津先生のクラスを取ったジャスティンです。先生はお元気ですか。先生のおかげさまで、僕も元気です。

僕は今学期小沢先生のクラスを取っています。しかし、根津先生の今学期に教えているクラスの飲み会に行くこのになります。

小沢先生によると根津先生も誘われたようなことを聞きました。ですから、根津先生にメールを送ろうと思います。

では、今週の金曜日の6時に吉祥寺の伊勢屋に

ジャスティン より

## <解答例3>

### 1) ジャスティンのメールの問題点

まず、先生にメールするので、“お元気でいらっしゃいますか”を書いたほうがいいと思います。

次に飲み会に行くことになりましたというパートはよくないと思います。行きたくないけど、行かなければいけないという感じがしますからです。そして、“根津先生もさそってくださいって小沢先生が言ってたからメールしました”というパートについて、違和感があると思います。なんか小沢先生が言ったから、根津先生に誘わなければいけないという感じがあります。最後の挨拶も変わったほうと思います。

### 2) 書き直し案

根津先生

こんにちは、上級日本語2の××です。お元気でいらっしゃいますか。

今学期に小澤先生のクラスをとっているんですが、飲み会を行うことにします。

時間は今週の金曜日の6時に吉祥寺の伊勢屋です。

多忙中と存じですが、飲み会にいらっしゃったら、うれしいです。

それでは。

××より

解答例2の学生は送付先の教師に対する敬意を表そうという意識はあるが「誘われたそうだと聞いたので誘う」という表現がその意図に反することに気付いていない。解答例3の学生が「飲み会を行なうことになる」は強引に感じるとして「・・・にする」に改めているが、これも単にメール文を書かさせていただきだけでは、この学生の「～ことになる」と「～ことにする」という日本語表現の理解・使用について効果的なアドバイスを与えにくかったことだろう。

このメールについての設問の解答全体からは、学生達は皆、相手や状況に対して必要な情報を与えてわかりやすくし、読み手との関係にあわせた敬意表現を用いるなどして適切な書き分けをしようという意識を持っていることがわかった。しかし一方で、いくつかの文章例については具体的な改善点が指摘できるが十分ではなく、より多くの文章について分析・評価できるような力を養う必要があることもわかる。つまりこの学生達には、さらに多くの文章に接し、評価を加える経験が必要なのだと言える。

メタ認知を身に付けるということがコースの目標であったので、評価に際して実際に文章を書かせると共にメタ認知をも問うてみたのであるが、それは目的に合致した評価を下すという意味だけでなく、彼らの今後の学習支援のためにより良いフィードバックの材料を得るという意味でも意義があったようだ。

#### 4. クラス活動の例2：「調査・発表プロジェクト」

このコースの大きな柱の一つに「調査・発表プロジェクト」があり、プレゼンテーションの仕方を学びつつ最終的にはコース全体で発表会をすることになっていた。コース開始当初は個々人で調査・発表しても、グループで調査・発表に取り組んでもどちらでも良いことになっており（後者の場合には分担して全員が必ず調査も発表も行なうという約束になっていた）、コース全体で何か統一テーマを設けても全員独立したテーマでも可としていたのだが、全体で議論した結果、何か統一テーマを設けてグループで取り組むことになった。テーマは色々考えた結果、読解のクラスのフリーディスカッションや休み時間にも学生間で盛り上がっていた話題である「ICU への不満」を取上げてはどうかということになった。

このテーマに決まるまでが実は一苦勞だった。というのはコース開始直後に学生達から「もう自分で自由にトピックを決める課題には取り組めない」という声が次々あがったからだ。本学に来てからの2学期間にどのコースでも各自が自由にテーマを決められるタイ



プの課題（レポート執筆、調査報告、スピーチなど）がいくつもあり、もうアイデアが尽くしているというのである。しかし、学期全体を通じて取り組むプロジェクトであるため、それに注ぐ気力・労力を考えれば積極的な動機を欠いたテーマではプロジェクトの失敗は半分決まったも同然である。そのような教師の考えを伝えたところ学生達もテーマの押し付けは望まないということになり、教師も学生も懸命に考え、議論した結果決まったのが「ICUへの不満」だったのである。学生達が約1年間の滞在のうち2/3を終えてみて、予想とのギャップ、他大学へ留学した友人の話からわかった本学の特徴などが実感として感じられてきた頃であったことが心理的に影響したようで、当時、教師との個人的な会話でも休憩時間の学生同士のおしゃべりでもこの話題になると皆その場に自然と集まってきて非常に生き生きと語っていた。そこでテーマの一つにそれを加えてみたところ全員一致で賛成を得たのである。

様々な角度から自分たちの感じている「ICUへの不満」を挙げてみたところ、「アイデアが枯渇した、訴えたいことはもう何もない」と述べていたのが嘘のように、あっという間にホワイトボードが一杯になるほどの項目が列挙された。そして、全部は無理でも少しでもそれを解消するために何ができるかという視点から調査・発表してみようということになり、最終的に『ICUの留学生を増やすためには』という統一テーマのもと、2つのグループに別れ、それぞれ「ICUにおける留学生の受け入れ状況」と「留学生がICUに抱いている不満」というテーマで調査をして発表をすることになった。

授業では毎週少しずつ、グループで議論するなど発表のためのスライド作りの時間をとった。授業内だけでは準備が足りないので学生達はメール上でやりとりしたり、昼休みに集まって話したりしていた。調査に協力してほしい人物との交渉やインタビューなどに自主的に出かけたりもした。

プレゼンテーションをする際の注意点についてはクラスでビデオ<sup>9)</sup>を見ながら話し合い、ハンドアウトの例を見ながら議論して確認した。プレゼンテーション・ツールであるパワーポイントの使い方についてはクラスでは説明が必要な学生に対して極々簡単に説明・演習の時間を取るに留め、授業外で対応した。

4週目にはプレゼンテーションの練習を兼ねて、必ず全員が少しずつ口頭発表を担当するという形式の中間報告会をクラス内で実施し、進捗状況を報告させた。その様子はビデオ撮りし、翌週それを見ながらフィードバックを行なった。しかし、そのフィードバックは教師から学生への一方方向のものではなく、まず学生達自身に発表前の準備としてプレゼンテーションの評価項目をグループごとに考えさせ、評価の重点をどこに置くかも含めた評価表を作成させた。フィードバックの際にはその評価表に基づく自己評価、同じグループの他のメンバーの評価、異なるグループの評価を各人にさせ、その評価の違いなどについてクラス全体で議論した。評価項目の異なりや基準のばらつきを前に同じ発表につい

て議論することで、発表には何が大切か、その発表はどのような設定の中で行なわれ、何が目的の発表会なのかについて意識化することにつながり、留意点の内容だけでなく重要性についても認識が高まったようである。教師もこれらの議論に参加し、学生の目が向かなかったが必要だと思われるポイントを適宜指摘したりした。

プレゼンテーションの仕方以外についてのグループ作業の間、教師は必要に応じてアドバイスをするなどしたもの基本的には学生主導で進行し、その代わり毎週グループディスカッションの議事録を提出させた。書記は交代制にして全員にその作業が当るようにした。外部協力者との交渉のために出したメールや文書、アンケートなどの資料、インタビュー内容の簡単な報告書などをその時々提出させ、クラス外の作業も評価の際に考慮した。議事録も課題の一部として評価し(グレードをつけ)、成績の一部とした。またPCの操作その他支援が必要な学生のリクエストには可能な限り授業外に時間をとって個別に対応した。

学期末には、せっかく調べたのだからクラスの中だけで発表会を完結させずに、関係者に自分たちの意見を聞いてもらおうということになり、急きょ公開発表会を持つことになった。テーマの性格上、留学生の中だけで意見を言っても何も変わらないし、急に何かが変わることはなくとも少しでも自分達の気持ちを関係各位に伝えることが一歩ではないかという気持ちが高まったからだ。コース開始当初は人前での発表は恥ずかしいと言っていた学生も、この頃には関係者の前で発表して意見をぶつけてみようかという気分になり、全員一致で公開発表会の開催が決まった。

ただ、公開とは言っても自分たちの意見が行政部ならびに日本人学生への単なる批判・攻撃と誤解されては困るという意見が出て、招待者のみ参加できるという形式の発表会となった。その招待者の選定も、招待状を書く作業も当日の司会も学生主導で進められた(学生が招待状を送った後に教師からも出席のお願いのメールを入れたりした)。発表会まで時間がなかったため学生達は準備で忙しく、場所の確保とお茶の準備、当日のビデオ撮りは教師がした。当日出席して下さったのは、教養学部長、国際渉外部長、JLP主任、ELP主任などの役職についている教師数名、学生グループなどいくつかの事務グループのスタッフ数名だった(学長代理で学長秘書も出席)。発表当日に集まった聴衆の顔触れに学生達は緊張を隠せない面持ちだったが、一方で非常に張りきって今までになくしっかりと自分たちの発表を行っていた。これほどのことが出来るとは正直予想していなかった筆者はあまりの張りきりようと入念な準備に大変驚いた。

発表では、学生達は教職員・学生へのインタビューやアンケート調査をもとに現状を報告し、「ICUの交換提携校はアメリカの大学に偏っているのではないか」「ICUは国際的であるがゆえに『日本』を経験しにくい」といった問題点を指摘した。また、留学生にとって大きな不満の一つは、学内で日本語を使うチャンスが少ないということが指摘された。バ

イリソガルをポリシーとしている本学では英語教育を受けている日本人学生は英語を使用したいと望んでおり、留学生の希望するところとのズレは大きい。発表では、それらの問題点を改善するためには行政部には何ができるかという提案があり、留学生自身も行政部あるいは日本人学生に対して意見を述べたり提案をしていく、言語使用については自分たちも日本語を積極的に使う努力をすることが必要であり、そうした互いの努力で ICU がより良い大学になるし、していくべきだと述べた。様々な不満を抱えていても、基本的には ICU に来て良かった、ICU は良い大学だという認識も留学生は持っており、そのような ICU の良さをもっとじょうずに宣伝していくことで留学生を増やすことは可能であり、ICU の良さを宣伝する案として、一年間本学に留学に来る外国人学生を ICU の宣伝部隊としてはどうかということも提案された。

発表の内容については、調査の仕方や集めたデータの利用法にまだまだ改善が必要な点も感じられたものの、全体としてわかりやすい説明、効果的なスライドの利用、こなれた日本語など、良いパフォーマンスだったと言えると思う。聴衆からも発表後に好意的な評価をいただいたし、学生達自身も非常に達成感を味わったようだ。

期末試験ではこの発表会での自分自身の発表、自分の属したグループの発表（全体として）、もう一つのグループの発表、のそれぞれについて内容や発表の仕方の良かったところと改善できることを挙げさせる設問を入れてみた。また、質疑応答の時間に聴衆から出た質問のうち、時間切れとなってしまって回答できなかったものについて各自の意見を書かせた。

これらの解答のうち、発表についての評価を書いたものを見てみると、どの学生も、クラスの中で皆で議論した口頭発表の際の留意点についてしっかりと内省して良い悪いを評価する視点ができていることがわかる。いくつか例を挙げよう。

#### <解答例 1>

##### 1) 自分の発表

私の発表はアンケートの結果の紹介で、その結果のまとめは悪くなかったと思います。しかし、書いた文章を読まずに、もっとアイコンタクトがあればよかったです。発音ももっと練習が必要でした。

##### 2) 自分のグループの発表全体

グループの発表の長所は〇〇さんが作ったパワーポイントだと思います。

短所は文章を読んでしまったところが多かったということです。または、グループ全員での練習がちょっと足りなかった気がします。

内容はちょっと厳し過ぎましたかなと発表が終わったときに思いました。ICU のいい

ところから始まった発表すればよかったかもしれません。

### 3) もうひとつのグループの発表

もうひとつのグループの発表は、自然に話したことがよかったです。パワーポイントの使い方も良かったと思います。

改善できるところは、もっと聴衆の注目を引くような話し方もかもしれません。(私たちももっと皆さんを興味持たせるように話せばよかったですが。)

## <解答例 2>

### 1) 自分の発表

長所は準備だ。準備は本当によかったと思う。一生初めてそんなに詳しい準備をしたので、満足を感じた。その上、「挑戦したい」、即ち「頑張りたい」という気持ちを持ち、先生達の前に出たことは非常に良いところだと考えられる。

改善したいのは、ノートを読むことだ。これは最悪だと思う。目コンタクトもなくなるし、聴者の注目を得ることも難しくなるし、準備が少ないかのような感じがするようになるので、発表のやり方を改善しなければならないと思う。

### 2) 自分のグループの発表全体

はっきりした構成がよかったと思う。解決方法もできたらいい。役に立つかどうかわからないが、何となく満足だ。

改善したいのは、もっと自分の意見を含めるということだ。なぜかというと、Power Points に夢中したので、あまり内容に活発に参加できなかった。もちろん、グループワークなので、分担をしなければならないという状態の中、Power Points の方が私にとってもっと面白かったから、悔いをしない。しかし、時間があつたら、内容ももっと自分らしく作ったかもしれない。

### 3) もうひとつのグループの発表

私達と違って、ノートを殆ど使わなかったことがすばらしい。

改善点は Power Points はちょっとつまらなかった。

ここに例として挙げた他にも、アンケートなどで集計した資料の使い方や内容のまとめ方についての批判や改善に向けた助言も見られ、発表会の後に反省会を持ち、これらのフィードバックを全体で共有できれば学生達が今後の日本語学習においてより良い指針となったのではないかと思われた。

## 5. この実践が示唆すること

以上、本稿では、上級2WPにおける実践報告として、コースの柱であったメタ認知の育成をねらったクラス活動と、4技能をフルに生かした調査・発表プロジェクトについて紹介してきた。最後に、この実践が何を示唆しうるか、また、このような実践をする場合の今後の課題についてについて論じることにする。

まず、調査・発表プロジェクト活動の実践が示唆することを考えてみたい。学生自身が興味のある問題について調査をした上で議論をし、成果をパワーポイントなどの機器を利用して発表するという日本語のクラスは昨今では珍しくない。筆者自身これまでも様々な同様の「調査と発表」といった形の活動を取り入れてきた。しかし、このクラスの学生達の積極的な姿勢や意欲は筆者の想像をはるかに超えたものであり、学生達自身の満足度が非常に高く、さらなる学習への動機を高めていた。心からの欲求とクラス活動が密接に結びつくことが能動的な学習のためにいかに大事かという古典的な説が改めて実証されたとと言える。

一方でそのような真の動機づけを探しあてるのがいかに難しいかということも痛感したコースであった。コース開始当初のことを思い返しても、単に学生自身にニーズを問うのではなく、教師が一方的に判断して与えるのでもなく、両者が共に日ごろから様々なことを語り合っていた中で納得の行くまで議論しあった結果、ようやくテーマが「掘り起こされた」というのにふさわしいのが今回の試みであったように思う。論文執筆でも同様だが、テーマの決定が最初の難関であるのだが、それは時間との戦いでもある。ぜひ取り組みたいと思うテーマが決まったところで、コースの半分が終わってしまっているような状況では満足できる調査をする時間はない。本学のように正味10週間という短い期間でコースが完結する機関ではこれは大きな問題である<sup>10)</sup>。今回は筆者が同じ学期に別のコースで学生達のほぼ全員と週に2度接していたこと、その前の学期から授業を担当していた学生達だったということが少なからずプラスに働いたと考えられる。コース編成や担当者のローテーションを考える際に一考すべき点かと思われる。

同時に、このような学生主導のプロジェクト型の授業における教師の役割についても示唆するところがあるように思われる。従来の教育観では教師は知識を持っている者であり学生にその知識を教え与える者として位置づけられていたが、最近の状況的学習論などの学習観では教師は学習の支援者であるというように役割が見直され始めており、学習も単に結果として身に付いた知識の量ではなく、その学びの過程をも含め、個人が主体的に「文化的実践に参加し」変貌を遂げていくアイデンティティ形成として捉えられ始めている(小澤 2001, 2002)。その具体的な実践の形は模索の途にあるが、学生を教室や教材から解放し好きなことを好きなようにやらせて教師は指導も評価もせずに傍観者に徹することだと曲解されることもあるのではないかと筆者は危惧している。状況的学習論は確かに従来型

の「個人の頭の中にどのような知識が蓄積されたか」を問うテストなどのみによる評価を否定している。それはコール（2002）が知能テストについて指摘したように評価しようとするものと評価法とが合致していないため測定結果がその学習者の学びについての誤った理解をもたらすからだ。しかし、学びの支援者としての教師はさらなる学びを支援するために学習者がどのように学んだかを理解し判定できなくてはならない。現在その目的にどのような評価法が適切であるかはまだ定説はなく議論の最中であるが、筆者は本コースの実践を通して、パフォーマンスだけでなくメタ認知をも問うという評価のあり方に解決の糸口があるように感じた。なぜならパフォーマンスの示した学習者の学びについてメタ認知に関する記述が補足的資料をもたらし、教師は学習者の学びについて理解を深めることが可能になり、さらに学びを進めるためにどうすればよいかという点についてより明確な助言を可能とするからである。評価のあり方については今後さらに理論と実践の連携により、具体的かつ実践的提言へと結びつけて行きたい。

## 注

- 1) 学習についての認知研究は、ある場面における特定の物事の学習が別の場面での問題解決に生かされるために「自分の知識についての認識」（メタ認知）を作ることが重要だと指摘している（赤堀 2002 : 178-180 など参照のこと）
- 2) 本学の1学期の授業は通常、期末試験期間を除き正味10週間からなる。
- 2) MMRにはインターネットに接続したノートパソコンが50台あり、ワープロソフトやブラウザ、プレゼンテーション・ツールなどがインストールされている。また、教師の使う端末の画面やDVD,VHSの映像を映せる大スクリーンがある。
- 4) スケジュールは学生の様子を見て適宜調整した。
- 5) 総務省総合通信基盤局調査『2004年度図解革命！業界地図 [最新] ダイジェスト』p.30
- 6) 教師の手元には教師宛のメールだけでなく、学生同士の間でやりとりされたメールもモニタリングのためにCCで送付するよう指示をした。
- 7) 授業外に各人が分担した作業をしたため、グループ作業の時間は自分が何をしたかをグループの成員に対して報告し、また今後の作業の進め方を全員で討議する時間とした。議事録は初めの一回についてはクラス内でどのような書き方がわかりやすいか話し合ったり、実際に書いたものを読んで直し合ったりしたが、以降は宿題としてクラス外で書かせた。書記は輪番制として各自最低2度は書く機会を得るようにした。出された議事録はグループの提出物として成員全体の成績の一部としたので、議論をしながらメモを取る書記にグループのメンバーが助言する様子も窺えた。

- 8) 敬意表現の度合いが学生にも判断できるように、学生全員が実際に2学期間教わった教師の名前を利用した（学生達の親ぐらゐの世代の教師）。
- 9) 帰国生のクラスで利用するために作成したプレゼンテーションの良い例・悪い例のビデオを利用。このビデオについては小澤（2001b）を参照のこと。
- 10) 時間との戦いという意味では、もう一つ問題を感じた。「調査・発表」という活動がしっかりとできるようになるためには、話し方やレジュメの用い方などの表面的なプレゼンテーション技術を磨くだけでなく、内容をどのように煮詰めて行くかも大変重要である。後者の点についてまだひとひねりもふたひねりもすべきであったというのが筆者・学生双方の感想であるが、正味9週間ではたとえトピックを小さく狭めたとしても限界があるように思われる。この点も今後の課題であろう。

## 参考文献

- 赤堀侃司（2002）『教育工学への招待--教育の問題解決の方法論』ジャストシステム出版部。
- 小澤伊久美（2000）「パラダイムの転換期にある日本語教育--教育学的見地から日本語教育を考える--」『ICU日本語教育研究センター紀要10』29-39頁。
- \_\_\_\_\_（2001a）「教師教育展望--状況的学習論の視点から--」『ICU日本語教育研究センター紀要11』37-48頁
- \_\_\_\_\_（2001b）「視覚的モデル提示を活用した口頭発表指導法---いい例と悪い例の比較の効果---」『小出記念日本語教育研究会論文集』9、41-57頁。
- コール・マイケル（2002）（天野清訳）『文化心理学』新曜社。
- 野田尚史・森口稔（2003）『日本語を書くトレーニング』ひつじ書房
- 一橋総合研究所（2003）『2004年度図解革命！業界地図〔最新〕ダイジェスト』